

## 特別企画 学会活動の現状と課題

標題のことについて、前月号に、(1)(総務・財務)、(2)(学会誌)、(3)(論文誌)、(4)(欧文誌)、(5)(事業：大会・出版・講習会)を掲載いたしました。

本号には、(6)(研究会)、(7)(国際)、(8)(規格)を掲載いたします。

この企画の趣旨については、前月号で紹介いたしましたように、会員の皆さまとともに、情報処理学会を、さらに発展、充実していくため、各事業の現状と課題について各担当理事に述べていただいたものです。会員の皆さまからのご意見をお待ちしております。

特別企画担当理事 千葉常世 苗村憲司



### (6) 研究会の立場から

田中穂積†

情報処理学会の研究会は、情報処理に関する学問の最先端の研究発表を行う場として利用されている。情報処理分野の裾野の拡大とともに研究会の数も増え、現在 **21 の研究会** が活動している。研究会では、研究発表を通じて成果を世に問い、討論を通じて研究を深めることができる。発表時間も十分あるので、密度の高い議論を行うことが可能であり、新たな研究の芽が育つ土壌を提供している。その意味で、研究会の活動の活性化は、本会のみならず、我が国の情報処理研究の発展にとって、きわめて重要であるといわざるをえない。

研究会と並行して、重要な研究課題に対して、少人数の研究グループ制が発足している。**研究グループ**は、予算規模の制約はあっても活動の自由度が高い。その一例として、たとえ情報処理学会員でなくても、研究グループの構成員として活動することができる。そのため、他の学問分野の研究者を構成員として迎え入れ、

学際的な研究を推進することも可能になる。こうした活動を通じて、一部の研究グループには、研究会の苗床的な役割を果たすことも期待されている。

以上に述べてきたように、情報処理学会の研究会と研究グループは、これまで我が国の情報処理研究の最前線を開拓してきたし、今後も開拓する重要な役目を担っているのであるが、課題はないであろうか。

研究グループが開かれた組織であり、非学会員でもグループに参加できることはすでに述べた。それに対して研究会は、学会員を構成メンバーとした、いわば閉じた組織である。研究グループが情報処理学会の研究会として活動の場を広げようとしたとき、この制約が問題化することがある。研究グループから研究会へと発展的解消を遂げようとしたとき、非学会員にとって、情報処理学会員となることのメリットがないことも十分考えられるからである。現在でも、非学会員が研究会の討論に参加することは

† 本会理事 東京工業大学

できる。しかし、彼が研究会の中心的なメンバーとして研究会の運営に参加し、積極的に活動する道は閉ざされている。今後、研究会をより開かれた組織にすることも検討する必要があるだろう。

すでに研究会の数が 21 に及んでいることを述べた。この数の多少は議論の分かれるところかもしれない。最近、研究会相互の乗入れによる共催の件数が増えていることは、分野によっては研究会の細分化が必要以上になされたことが、理由の一つとしてあげられるのかもしれない。研究が細分化し深化することは自然のなりゆきであろうが、時には、関連する他の研究分野にも目を向け、いわば横断的な視点に立ち、自己の研究会のあり方を問うてみることも必要であろう。関連する研究会の廃止や統合化も、必要とあれば積極的に押し進める勇気も必要であろう。ともすれば研究会の存続を考えがちな研究会の中から、最近統合化の動きが表面化し実行に移されようとしていることは、これまでの研究会の数の推移を考えると、画期的なことであるといえよう。そしてこれは研究会全体の健全な発展にとって好ましいことであるといえ

よう。研究会相互間でこうした議論を行う機会が今後増えることを期待したい。

研究会はシンポジウムを開催し、特定テーマに関する議論を深めることができる。またチュートリアルを開催することができる。開催の結果生じた剰余金は、研究会独自の企画に使うことができる。これは研究会の活性化に大きな役割を果たしていると思う。しかし、比較的地味な研究会で、シンポジウム開催などにより、剰余金が生じにくい研究会もあることを忘れてはならない。その辺りのバランスをどうとるかは、今後の検討課題であろう。一方、チュートリアルは、研究会の底辺の拡大が一つの目的であると考えられる。学生やこれからこの研究分野に参入しようとする研究者に向けた企画であるはずであるから、情報処理学会の全会員に向けたサービスの一環として位置づけることも必要だろう。一研究会の企画ではなく、情報処理学会全体としてチュートリアルを開催する試みが、いま少し多くなされていても良いかもしれない。それが結果として、研究会の活性化につながることになるのだろう。



## (7) 国 際

上 林 弥 彦†

### 1. ま え が き

日本のコンピュータ開発の世界における地位の向上、知的所有権の重視などの傾向にともなう、コンピュータ関係で我が国を代表する情報処理学会の国際的な寄与がますます重要とな

りつつあり、学会に対して従来より積極的に国際活動に取り組むべきであるという要請が内外より強まっている。情報処理学会自体が IFIP に対応して日本を代表する組織として作られたという歴史的な事実から、情報処理学会の国際活動は当初 IFIP に対する活動が中心であり、現在の学会の国際委員会も IFIP 国内委員会として、各 TC (技術委員会) に対する日本代表を中

† 本会理事 京都大学工学部高度情報開発実験施設、九州大学工学部情報工学科